第19週（5月5日～5月11日）トピックス：＜百日咳＞

百日咳の報告数が全国的に増加しており、本市では前週（第18週：4月28日～5月4日）時点で、年間累積報告数が116例と、百日咳の全数把握を開始した2018年以降で最多、さらに今週は新たに12例の報告があり、128例となりました。全国の年間累積報告数も16,475例と過去最多であった2019年の16,846例に迫る状況となっています（表1）。

●百日咳の年間報告数が過去最多を更新（京都市ホームページ：5月8日報道発表）
https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000341099.html

【患者数】

2018年以降の全国の累積報告数の推移を見ると、2018年及び2019年は年間1万人以上の報告がありましたが、2020年以降は新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴う感染予防の徹底等により激減しました。しかし、2024年7月頃から再び増加がみられ、本年は第11週（3月10日～16日）時点で、過去同時期の年間累積報告数が最多となったのち、さらに急激な増加が続いています。抗菌薬が効きにくくなる百日咳菌も確認（下記URL参照）されていることから、今後の発生動向に十分な注意が必要です（図1）。

【年齢構成】

2018年～2025年19週までの全国の年齢階級別割合では、10～14歳（32.6%）が最も多く、次いで5～9歳（29.3%）となっており、これにワクチン接種前の時期を含む0歳（4.3%）、及び1～4歳（5.1%）を合わせた15歳未満で約70%を占めています（図2）。なお、百日咳は学校保健安全法で、学校において予防すべき感染症とされており、特有の咳が消失するまで、または5日間の適正な抗菌薬による治療が終了するまでは出席停止となります。

【百日咳】

百日咳は百日咳菌の感染による感染症です。感染経路は、鼻咽頭や気道からの飛沫感染及び接触感染で、潜伏期間は、通常7～10日間です。症状は普通の風邪症状で始まり、次第に咳が激しくなり、その後、特徴的な短い咳が連続した咳き込み（スタッカート）の後、息を吸うときに笛の音のようなヒューという音が出る（ウープ）発作の繰り返しが約2～3週間持続します。息を詰めて咳をするため、顔面の浮腫、点状出血、眼球結膜出血、鼻血などが見られることがあります。その後、回復するにつれ、次第に激しい咳発作は弱くなりますが、時々発作性の咳があり、発症から回復するまでに2～3か月かかります。

乳児では典型的な咳が見られないこともありますが、重症化すると、無呼吸発作からチアノーゼを起こしたり、呼吸が止まり死亡する場合があります。

【予防等】

予防はワクチン接種です。定期の予防接種では生後2か月から計4回の接種が必要です。予防接種をきちんと受け、乳幼児を百日咳から守りましょう（下記ホームページ参照）。

百日咳は、初期症状では風邪による咳だと思い込み、受診も遅れがちです。百日咳菌は周囲への感染力が強く、症状が軽くても菌の排出があり、家族内で患者と接触した場合、感染リスクは非常に高くなります。特に、予防接種をまだ受けていない新生児・乳児が罹患すると重篤化しやすいため、周りの人が感染源とならないよう、手洗いや咳エチケットなど基本的な感染対策を徹底し、注意しましょう。また、自覚症状があれば早めに受診しましょう。

●「百日咳患者数の増加およびマクロライド耐性株の分離頻度増加について」（（小児感染症学会 予防接種・感染症対策委員会）
https://www.jpeds.or.jp/uploads/files/20250402_hyakunitizeki1.pdf
●「京都市が実施する子どもの定期予防接種について」（京都市ホームページ）
https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000130799.html

表１　京都市及び全国の報告数の推移

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年 19週
京都市	87	113	19	4	3	1	26	128
全国	12,115	16,846	2,819	707	491	1,000	4,093	16,475

図１　全国の累積報告数（2018年～2025年19週）

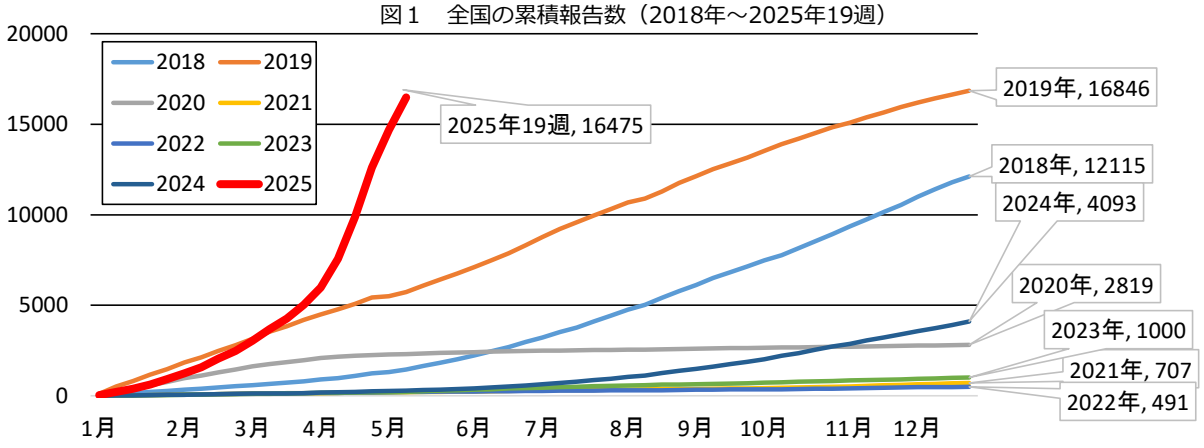
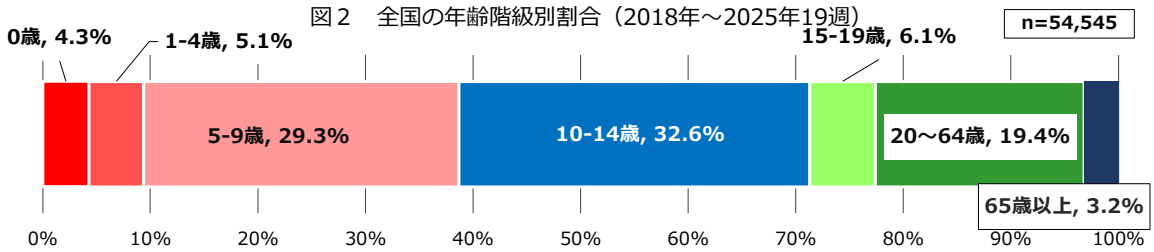
図２　全国の年齢階級別割合（2018年～2025年19週）